チリワインを味わい深くする方法

～その安さと美味しさの秘密～

外国語学部 スペイン語学科 四年Ｂ組　神林沙知子

はじめに

数年前、日本では健康に良いとされるポリフェノールがテレビや雑誌で注目され、多くのワイン愛飲者を生みワインブームをもたらした。ワインの専門士を表すソムリエという言葉も世間一般に知られるようになった。同時にチリ産ワインは飲みやすくワイン初心者に適していると評価されたことから、「チリ産ワインは安くて美味しい」ということも認知された。あるワイン嗜好本ではフランス産なら五〇〇〇～六〇〇〇円クラスのワインがチリ産では一〇〇〇円前後で買える、という。南北に細長く昼夜の気温差が大きいチリは気候がワイン用のブドウ栽培に適しており、さらにフランスなどで猛威を振るう害虫の存在がなく安定した生産が出来る、というのが安価の理由として述べられている。しかし、ただ気候が適しているからというだけで、日本にあるスーパーの酒売り場で遠く離れたチリからのワインが一〇〇〇円以下の特売で並ぶことになるのだろうか。

この答えは意外にも、軍事政権時代の政策によるチリ経済の転換と農薬の大量輸入という事実に隠されていた。チリワインの「安さ」と「おいしさ」の理由をソムリエのようにワインの香りや渋みからではなく、チリの経済から私なりに検証してみた。

一、銅輸出国からの変化

（一）貿易大国チリ

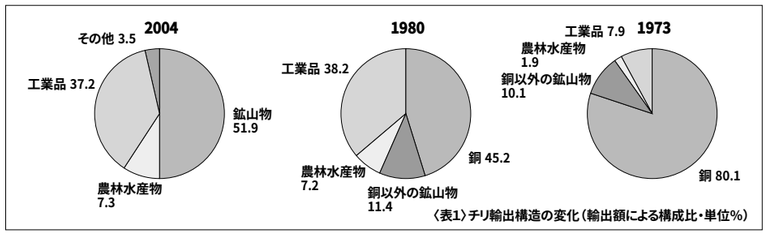
現在、チリはＦＴＡ（自由貿易協定）先進国と呼ばれているように中南米諸国だけでなくカナダ、アメリカ、ＥＵ、韓国とのＦＴＡを結んでいる。また日本とも締結に向けて共同研究会を進めているところである。チリの輸出というと鮭マスが有名だが、近年ではブルーベリーの輸出は南半球第一位。他にもローズヒップやキウイ、ブドウなどの輸出品も目立ってきている。こういった面から最近では日本においてもチリとのビジネス機会が多く見られる。南半球に位置しているため日本をはじめとする先進国へ端境期に農産物を輸出することができるのが要因の一つだろう。

（二）銅輸出

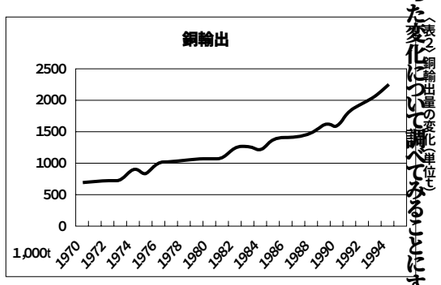
しかし、ここで忘れてはならないのが、かつてのチリは銅が輸出のほとんどを占めていたということである。〈表1〉からわかるように一九七三年には輸出の八〇・一％が銅であったが、その後、一九八〇年には四五・二％、二〇〇四年では約四〇％と徐々に全体に占める割合は減少している（二〇〇四年については鉱山物の中に銅が含まれている）。しかしこれは銅の輸出量が減少した、チリにおける銅が衰退した、ということではない。〈表2〉、〈表3〉からもわかるように価格は変動しているものの、輸出量そのものは減少してはいない。〈表4〉はチリの輸出額と輸入額をグラフにしたものだが、ここから明らかになるのはチリの貿易全体が成長していることである。つまりチリの輸出において銅以外の輸出品が大きく増加したために銅が占める割合は減少したにすぎない。これは先程挙げたような非伝統的農産物やパルプなど輸出品が多様化したためである。

ではこのような鉱物依存のモノカルチャーからの変化はなぜ起こったのだろうか。

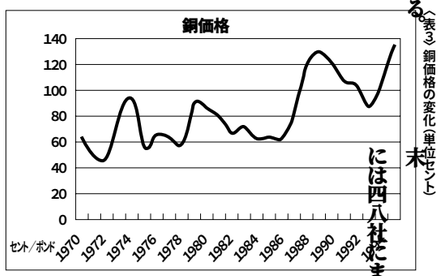
〈表1〉、〈表4〉から明らかになるのは一九七〇年代に大きく変化があったことである。ワインに関していえばチリでは一九八〇年代にフランスなどのワイン主要国からワイン作りの最新技術が導入されたといわれている。どのような理由でその時代に最新技術が国内に入ってきたのか。そこで一九七〇年代のチリに起こった変化について調べてみることにする。



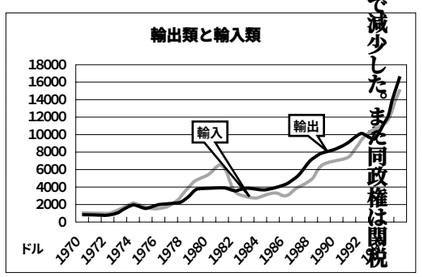
〈表1〉チリ輸出構造の変化（輸出額による構成比・単位％）



〈表2〉銅輸出量の変化（単位t）



〈表3〉銅価格の変化（単位セント）



〈表4〉総輸出額と総輸入額の推移（単位ドル）

（出典・BANCO CENTRAL DE CHILE及び「チリの民主化問題」より筆者が作成）

二、「おいしさ」の秘密～チリの経済政策～

（一）民営化

チリにおける経済の変化は一九七三年、ピノチェト政権が誕生したことに始まる。ピノチェト軍事政権は人権弾圧や大量虐殺の疑惑などが歴史に残っている。だが、ここではこの政権の経済政策の分野に注目したい。ピノチェトはそれ以前のアジェンデ社会主義政権で国有化された企業を次々と民営化した。一九七三年のクーデター当時に五九八社あった国公営企業が一九八〇年末には四八社にまで減少した。また同政権は関税を大幅に引き下げるなど経済への規制を完全に撤廃した。貿易の自由化をしたチリには外資企業が参入して国内の工業は衰退し、街には失業者があふれた。いずれも軍事政権下の弾圧のもとで成し遂げることができたのだと考えられる。資本の自由化にも関わらず、一九六〇年代末のブラジルのように外資が国内工業投資に向かわなかったのはなぜか。それは、チリは人口が少なく労働力が確保できないため外資の工場

は作られず、国内に外国の既製品が流入したがために国内産業が衰えたためである。

しかしここで一次産品の質を向上させる技術や知識がチリに持ち込まれた。ピノチェト政権時代のチリは他のラテンアメリカ諸国に先駆けて新自由主義政策を実施し、現在の貿易大国チリを形成したとされている。これはシカゴ・ボーイズと呼ばれるチリ人エコノミストによって行われた。彼らは当時市場重視の理論を打ち出したミルトン・フリードマンで有名なシカゴ大学で自由主義を学んだチームであり、このピノチェト政権下の完全な自由化がチリを一次産品輸出経済へと変えることとなった。

(二) 債務の債権化

チリ経済の変化の要因はもう少し後にもある。一九八二年にメキシコで金融危機が勃発したのを皮切りに、他のラテンアメリカ諸国でも対外債務が累積し、チリも例外ではなかった。このときチリの銀行は債務を割り引いて外資に売り、外資はこの債権でチリの国営企業を買う、という方法を採った(デット・エクイティ・スワップ)。政府はこれに対し国公営企業を次々と売却した。この方法はチリだけが採った特別なものではないが、チリの注目すべき点はこの期間、債務を減少させつつも持続的に成長したことにある。結果的には、ピノチェト政権発足時よりもこのときの政策が成功し、今日ではチリはラテンアメリカ債務国の中でも債務問題解決に成功したと評価されることとなった。

(三) つまり、なぜ「おいしい」ワインが作れるのか

繰り返しになるが、債務の債権化はチリに限って行われたものではない。多くの国が債務危機に襲われ、その解決策としての一つの傾向となっていた。一九七〇年代のピノチェト政権による自由化をきっかけに外資企業が国内に入ってきた。さらに一九八〇年代には多くの政府系の企業を外資が買い取った。当時世界では国際企業による民営化企業の買収が行われていたときでもある。つまりピノチェトの新自由主義政策と国際的動向の二つの理由によってチリにはそれまで無かった最新技術や経営方法が持ち込まれたのである。ワインに関しては、醸造方法や輸出用の保存技術などを持ったヨーロッパ企業がチリ国内で経営を始めることとなった。高度な技術によってチリで作られるワインはヨーロッパの先進国のものと同じくらい上質なものが出来上がり、世界に輸出される製品となったのである。

以上までが「おいしさ」の理由である。では続いて「安さ」の理由を探ってみる。

三、「安さ」の秘密

(一) チリにも害虫は存在する

〈表5〉は日本におけるワインの輸入量や価格を示すものである。チリワインの平均価格は二五五二円。「ワインといえば」のフランス産は五四九八円、ついでイタリア産は三二一五円とチリワインに比べて高い。日本に輸入している他の上位国と比較してもチリワインの単価は安い。もちろん、チリはフランスやイタリアなどヨーロッパに比べ土地や人件費、水などのコストが安いことはチリワインの「安さ」の理由の一つであると考えられる。だがそれは理由のすべてではない。

〈表5〉日本市場におけるワイン

	輸出額(1000ドル)	順位	数量(本)	順位	単価(75cc当たり)	順位
フランス	409572	1	74498612	1	5498	2
イタリア	108957	2	33889697	2	3215	3
米国	49103	3	16144663	3	3041	6
ドイツ	27363	4	8969371	5	3051	5
チリ	25214	5	9880696	4	2552	8
オーストラリア	20815	6	6712101	7	3101	4
スペイン	20076	7	8714389	6	2304	9
南アフリカ	4592	8	1997105	8	2299	10
ニュージーランド	2928	9	442495	10	6618	1
アルゼンチン	2559	10	935387	9	2736	7

(出典:ジェトロ調査レポート2005を参考に筆者が作成)

一般的にはチリワインが安いのは気候条件によるとされている。ワイン輸入企業や販売店はみな、チリはワイン作りに最適な気候風土で、ヨーロッパで猛威を振るう病害菌(フィロキセラ)が存在しないため毎年安定した量が出荷できる、と伝える。しかし、先ほど述べたようにチリは大量の農薬を使用している。農薬の輸入量は二〇〇四年一年間で二・一九六トンにも上る(PUNTO FINAL 〇四年十月五七八号の記事より)。この農薬をワイン用のブドウ栽培に使用しているかどうかについては資料がないが、チリの輸出する食品の一一%がワインであり、チリにおける農業でブドウは高い比率を占めている。したがって、ブドウ生産で多くの農薬を使用している可能性が高いことが考えられる。そこで、ここではワイン用のブドウに対しての使用が存在しているものとして話を進めていきたい。

ヨーロッパにおける果樹栽培では農薬の使用は厳しく規制されている。ここからもチリにおけるワイン企業の多くヨーロッパの外資であることから「安さ」のわけが見えてくるのではないか。つまり、ワイン先進国の外資企業はコストを引き下げるため自国での農薬使用規制を逃れ、チリでのワイン生産を行っているのである。チリは農薬の使用が規制されていない。農薬の使用はもちろんワインを好んで飲む人々にはあまり話題にあがっていないが、チリワインの安さの秘密のひとつはこの農薬の使用である。

(二) 労働問題

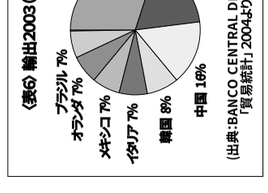
近年、チリでは農薬による影響で奇形児が生まれることが珍しくはない。チリは三三の地域に区分されているが、V、VI、VII、VIIIの各地域とメトロポリタン地区はワイン用のブドウだけではなく輸出用の野菜やフルーツの栽培を行っており特に農薬の使用が多い地区といえる。そこで働く人々は燻蒸剤(青酸カリの類。病菌および害虫を殺す薬剤)で消毒された畑に入り、しばしば手袋をはめずに収穫を行っている。そのため指の感覚がなくなってしまうこともある。さらにはこの作業時の服のまま帰宅するため家族も汚染されてしまう。にもかかわらず労働者はその仕事を辞めることはできない。そのような過酷な労働でさえやっと手に入れた仕事であるからだ。

果樹栽培が盛んな地域はで他の地域と比べ奇形児が生まれる子供の数が三倍にのぼる、という調査結果もある。農薬にさらされた両親は先天性の脳水腫やダウン症などの子を持つ危険性が四〇%と高い。このような事実が一部新聞などで取り上げられているにもかかわらず、この六年間でチリにおける農薬輸入は二・八倍にも増えている。農作物の収穫時期が学校の休暇と重なるため、子どもも家族といっしょに農園で働くこともある。チリはピノチェト時代の政策で労働条件が個々の企業と個人とで行われるため企業に対する国家の規制がない。人件費に関しても同じであり、企業の意のままに引き下げることができる。農薬のばらまかれた畑で低賃金で働き、その影響で障害を持つ子供を抱えた母親がチリの貿易経済を支えている。輸出拡大のために農薬使用を強いられている現状がもたらした問題である。

(三) 輸出意識の商品傾向

安さの秘密はこれだけではない。実はチリ国内におけるワイン消費量はあまり多くはない。もともとチリはワインをそれほど飲む文化はなかった。今もそのほとんどが輸出向けだ。〈表6〉からわかるようにワインの三分の一がアジア向けである。アジア諸国の割合が多いのである。特に日本はチリにとって重要な市場である。これは主としてプロチレ（チリ外務省輸出促進局）の活動の成果である。プロチレは長期間、日本市場へチリ製品を輸出すべくコンタクトを続け、多くのセミナーやワインの試飲会などのアピールの場を設けてきた。これは最近の傾向ではなく、ピノチェト時代からチリは日本や韓国の市場を意識した一次産品の輸出振興政策を行ってきた。

最近ではワインに関しても日本で高品質志向が高まっている。安いだけのワインでは勝ち組に入れない。そのためチリでも一九九五年に産地表記を義務付けたD・O法（Denominacion de Origen）が制定された。その結果、安くて飲みやすいものだけではなくチリのワイン製造企業の多くがフランスなどのようにシャルドネ等の貴品種のワインを販売するようになった。また、輸出向けのブランドイメージを意識して有機ワインメーカーも登場した。



おわりに

チリはラテンアメリカにおいていち早く新自由主義経済改革を実施し一九八〇年代後半にはその成果が現れ「チリモデル」という言葉で知られるほどの成長を遂げ、ラテンアメリカ上位の貿易国へと発展した。「チリモデル」は他のラテンアメリカ諸国の経済政策にも影響を与えた。しかしその成功の陰には雇用体制や労働基準法に関わる問題が存在することが明らかとなった。「安くておいしい」といって喜んでいるわけにはいかない。

最後に、チリは以前のようなモノカルチャー経済ではない。ワイン作りに必要とされる設備や経営管理などのノウハウは他の製品にも活かされ、また新たな事業機会にもつながっている。チリ財団によればブルーベリーを国内で食べる習慣はなかったが一九八九年から栽培が始まった。またチリには根付いていなかった外来作物が今では年間約五三〇万箱（一箱一キログラム）を輸出している。さらにジャスミンや缶詰、ドライフルーツなど農作物関連製品の輸出総額は二〇〇四年で前年比二〇％増加の七億二千万米ドルに達したそうだ。

しかしチリのフルーツ経済はこのまま成長を遂げるといえるのか。他のラテンアメリカ諸国はこぞってチリを追いかけ非伝統的農産物をアジア諸国へ輸出している。西のアジアの市場を目指すラテンアメリカ諸国は、市場をどこまで拡大できるのか。チリはいつまでラテンアメリカでの先進国でいられるのか。実際、ブドウの輸出は減少傾向にある。また先に述べた労働問題の解決も求められる。貿易大国チリの抱える問題は大きい。

[参考文献]

・「中南米債務　危機のメカニズムと打開策」
ペドロ＝パブロ・クチンスキー著
（サイマル出版会・一九九〇）
・「チリの選択・日本の選択」
（毎日新聞社・一九九九）
・「チリの民主化問題」
吉田秀帆著（アジア経済研究所・一九九七）
・農林水産省　http://www.maff.go.jp
・JETRO
http://www.jetro.go.jp/chile/index.html
・Punto Final